



6月の星空案内



北

2023年6月中旬
21時頃の空

東

西

南

- 0等星
- 1等星
- 2等星
- 3等星



6月は梅雨の影響でどうしても星空が縁遠くなりますが、空は初夏の装いに変わっています。天高い位置にはギリシャ神話の英雄「ヘルクレス座」が昇り、その南側にはギリシャ神話の名医アスクレピオスの姿が描かれた「へびつかい座」が見つかります。アスクレピオスは医学の象徴的存在でもあり、この星座の両脇に位置する「へび座」は、健康のシンボルとしても伝わっています。近年コロナ禍で話題になった世界保健機関（WHO）、そのロゴマークには杖に蛇が巻きついた姿が描かれており、アスクレピオスが手にしていた杖がモチーフになっています。へびつかい座のさらに南側には小学4生も学習する「さそり座」が昇り、1等星アンタレスの赤い輝きが目を惹くことでしょう。

天体観望会のご予約はネットかお電話にて 【毎週土曜日開催 / 19時～, 20時～, 21時～】

阿南市科学センター

電話 0884-42-1600

<http://ananscience.jp/science/>

■ 6月の月の満ち欠けと惑星について



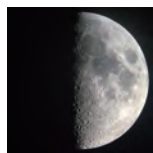
満月
4日



下弦
11日



新月
18日



上弦
26日

6月の天体観望会で月が見える日時は？



6/3(土)・・・20時、21時がおすすめ



6/24(土)・・・20時、21時がおすすめ

水星：7月1日外合。月のはじめごろ、明け方頃東のごく低空で見える。【約0等】

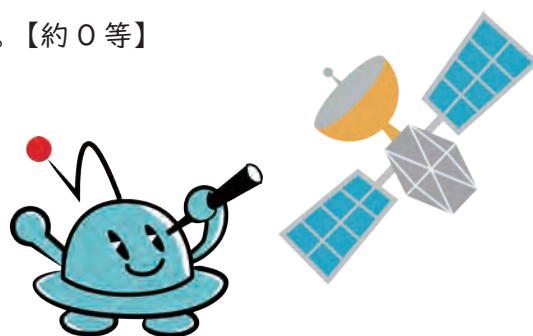
金星：宵の口から西の空で観察しやすい（宵の明星）。【-4.4等】

火星：宵の口から西の空、金星の近くで見えはじめる。【約1.7等】

木星：夜明け前、東の低空で見える。【約-2.1等】

土星：夜半過ぎ、東よりの空から昇ってくる。【約0.9等】

※各惑星の等級は中旬頃の明るさ。水星のみ月上旬頃。



■ おすすめの観察対象

【金星が観察好機】

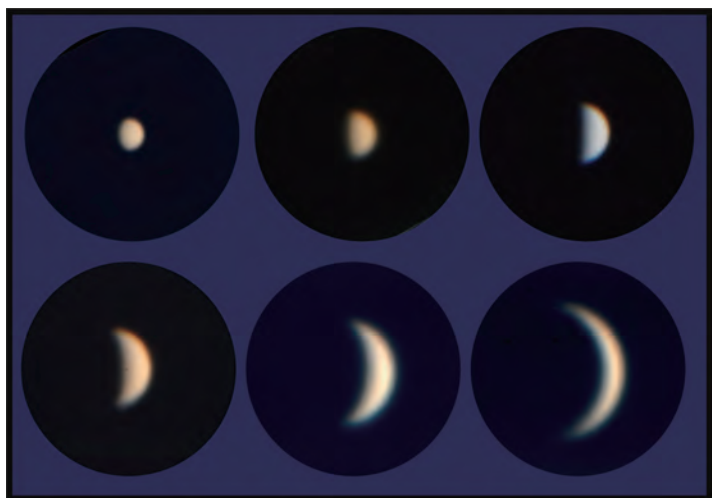


図1：四国最大の望遠鏡で撮った金星の形や大きさの変化（2021年度）。
撮影：A. Suzuki & K. Imamura

宵の明星こと金星が観察の好機を迎えています。日没後西の空高度20度以上の高さで一際明るく輝いて見えます。ただし6月は夏至（6月21日）があるため、日没は19時過ぎとなり、観察は20時前からが行いやすいでしょう。6月中旬頃までは、21時半を過ぎても西の空低いところで観察し続けることができます。さらに6月22日には月齢4の三日月と接近して観察することもできます。

ところで、金星は図1のように、その見かけの形や大きさが変化することが知られています。今年の6月は半月のような形で見え、その仕組みは中学3年理科で学習する内容にもなっています。今月、四国最大の望遠鏡で観察したい方は20時の回をご予約ください。

■ おもしろ天文学

【わし星雲 M16】

写真に撮ると赤色の星雲が浮かび上がるM16は、へび座（へびつかい座の東側）に位置する天体です。愛好家の間では、星雲全体の見た目から「わし星雲」という愛称で親しまれています。さらに、星雲の中央部には「創造の柱」と呼ばれる長細い構造があります。これは1995年にハッブル宇宙望遠鏡が撮影した画像からそのようなニックネームがつけました。天文学者の間では新しい星の形成が盛んな領域だと考えられており、これまで電波、赤外線、X線など様々な電磁波で科学的な観測が行われています。なおM16には、この星雲で誕生したと考えられている散開星団が付随し、望遠鏡では星雲よりも、星団の存在が際立って見えます。

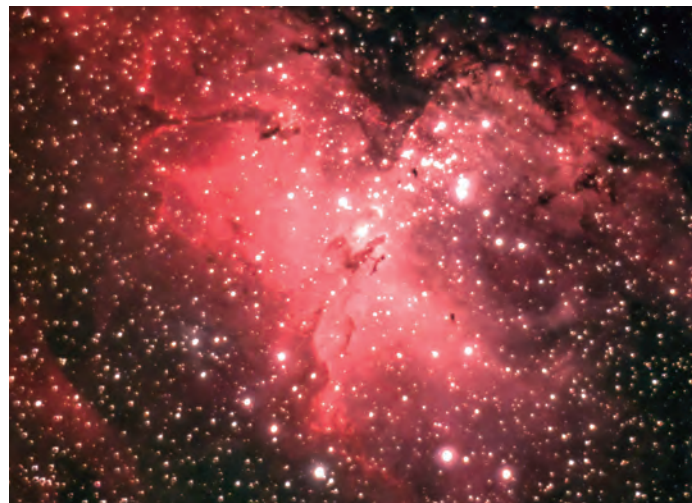


図2：わし星雲 M16（撮影：K. Imamura）
Meade 25.4cm (F6.3) + ASI294 MC pro

※この写真は一般財団法人全国科学博物館振興財団の支援を受け撮影しています。